

校長室だより～和光高校今昔 第31号 H26.12.5

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

和光の原点はマラソン大会にあり

和光の地に戻って一番うれしかったのは「Bコース」が健在だったことである。和光生の強い身体と心はここで鍛えられる。社会に出ても変わらない不撓不屈の精神は間違いなく和光高校のアイデンティティである。その発露の機会がマラソン大会なのだ。20周年記念誌に寄稿された尊敬する堀江治男先生も同様のことを書かれていた。

マラソン大会の歴史を語るうえで「鉄人堀江先生」を外すことはできない。おそらくは和光史上最強ランナーであろう。着任された昭和48年の第2回大会から昭和63年までの16回のうち、走らなかった2回を除いてすべて30位以内でゴールされている。昭和13年生まれの先生にとって30代半ばから40代にかけてのまさに油の乗り切った時期、最高成績は2位、主役は生徒であることを存じていらっしゃる。しかも決して仕事は手を抜かない。昭和55年に1年10組の担任をされているときは、クラスの全生徒の出発を見送って最後尾からスタート。およそ1000人を抜き去り確か28位でゴールされている。狭山湖畔の狭い道でこの人数をかわすのはそれだけでも至難の業、笑顔で抜き去られる颯爽とした姿が抜かれた私の忘れられない思い出だ。76歳になられた現在でも、毎朝4時起床、畑仕事とランニングとあいさつを欠かさずに変わらない澁刺さでお元気に暮らしていらっしゃる。

さて、記録を顧みると池田謙一（11期生・陸上部部長）さんの三連覇が特筆される。男女42回、のべ3万人のランナーのうち唯一の偉業である。現在48歳になる池田さんを校長室に招き当時の話をうかがった。ほとんど変わらぬ容貌と鮮明な記憶に驚かされた。



「石堂先生率いる陸上部はマラソン大会で上位入賞が義務付けられていました。1年生の時は何回か狭山湖畔のコースに試走に行くなど万全の準備で挑みました。レースでは前年に優勝している3年の小島先輩について走りました。苦しさよりも爽快感が記憶に残っています。思い出すのは体育の授業でお世話になっていた北村先生から、『優勝したら寿司食べ放題』と言われていたのに実現できなかったことです。ただしこれは翌年の優勝の後に実現しました。太郎寿司でウニ・トロ・

イクラなど目いっぱいご馳走になりました。ありがとうございます。3年ではコースが変わり不安もありましたが何とか優勝することができ本当に嬉しかったです。まさか3連覇が自分だけとは思っていませんでした。頑張った甲斐があります。」

池田さん3連覇にはいくつかのエピソードもある。3回の優勝とも2位に1分以上の差をつけての圧勝だった。距離にしておよそ400m、すべて余裕の勝利であった。そのスピードに対抗するために2年生では先導がそれまでの自転車からスクーター（北村：スペーシア）に変わった。さらにコースが変わった3年生の時はやはり北村先生から、中間点までは飛び出すなど厳命されていた。それほど池田さんは強かったのだ。仮にクロスカントリーでこの距離の競技があれば間違いなく全国レベルであったはずだ（残念ながらトラックとはあまり相性が良くなかったようだ）。現在でも市民ランナーとしてフルマラソンに挑み、朝霞陸協でジュニアの指導にあっている池田さんから、今の生徒達へのメッセージもいただいた。

「頑張れば必ず自分に返ってきます。ただしそれは今すぐとは限りません。頑張った自信は自分を成長させてくれるはずですよ。辛いけど乗り越えてこそ価値があると思います。頑張ってください。Bコースで蓄えた力は必ず役に立つはずですよ。」



3連覇達成の瞬間（昭和60年1月）

さて、平成26年11月28日、43回目となる大会が行われた。

女子で戸頃愛美が史上二人目、女子では初の3連覇を達成した。見事としか言いようがない。おめでとう！　そして完走率、実に99, 2%!!!　Bコース健在を示した。

